

土を救出する

2010年5月11～29日

2010年の連休明け、大藪家土塀に「です。」「です。」と文字が逆さになった防音シートが張られた。大藪家の解体工事がついに始まることに気づき、急ぎよ土塀と母屋の門・屋根に使われている土すべてを救出することに取り組んだ。

無謀な企てで、解体業者にも許可をとらねばならなかったが、芸大すぐ裏の松尾工務所の松尾陽さんから、解体に従事する吉井工務店の吉井忠信社長を紹介いただいた。松尾さんは大枝アートプロジェクトから峠の茶屋に至るわれわれの一連の活動を見ていて、土救出の願いに応じて下さったのだ。

吉井さんは、土を再利用する企図を聞き、通常は急ピッチで進めなければならない解体工事の一部を止めて、いつ終わるかわからないわれわれの土救出作業を月末まで待って下さった。

救い出すのは、土塀と門屋の屋根と壁の土。解体工事は、土塀が一番あとになると聞いたので、門屋から取りかかった。門と土塀は大藪家で最も古く、ともに江戸時代からのものである。



2010/5/10



2010/5/12

手前が門屋の屋根。母屋は半分解体されている。屋根に乗るのは長谷川直人教授。



2010/5/11

最初に手伝ってくれたのは、造形計画を履修していた日本画専攻2回生の川端あす香と米倉由佳。



門屋の壁をカケヤで叩いて壁土を丁寧に落とし、土囊につめていく。土埃が舞い上がる。



屋根から土を落としていく。



魚の骨から肉をほじるように、壁土を丁寧に掻き集める。土は極上。昔の左官職人の手を感じる。



休み時間、現場で拾った縄で吉井工務店の作業員と遊ぶ学生。



二百年以上昔の屋根には瓦を留める大量の土とスサがのっていった。古い野地板は竹製だった。「芸大に入ってこんなことをするとは思わなかった」(木下愛理・稲垣若菜)



屋根土と壁土を土嚢につめていく。土嚢は全部で150袋前後になり、門屋だけで土を3トン近く集めたことになる。土嚢はつちのいえの丘に何往復もピストンで運んだ。

吉井工務店

吉井忠信さん



吉井さんの理解と協力がなければ、大藪家の土を救い出すことはできなかった。われわれの手作業を気長に待って下さるだけでなく、作業しやすいよう、重機で周囲をきれいに片づけたり、壁土が地面の土と混じらないよう、畳を引いて下さったりした。

社員も怖れる迫力がある半面、心やさしく、解体作業はじつに丁寧に、ミンチにせず、部材ごとに丁寧に仕分け処分する。伏見の工務店の広大な土地には、大量の廃材や現場から救い出した庭木が配されている。解体業を通して社会を物質の流れから知る吉井さんとの出会いは大きく、その後も親しい交流が続いた。



吉井さんは、重機をベンチやカナヅチのように軽やかに操る。



土塀をゆっくり押し倒す。(2010/5/27)

土塀は、土地を明け渡す5月末までに撤去する必要があった。だが、土塀は南側が厚さ約30cm、高さ約1.2m、長さ約14m。門の北側も、厚さ30cm、高さ約1m、長さ約6mあり、土の総量は約 $4.5\text{ m}^3 + \text{約}1.5\text{ m}^3 = \text{約}6\text{ m}^3$ 、比重2として約12tにのぼる。人力のみでそれに対処する。



土塀に拜む



ドッサリ

5月27日（参加学生が多い授業日の木曜）、南側の土塀半分の土を救い出した。

- (1) 倒す前に土塀に感謝と安全を祈願して折る。
- (2) 地面にシートを広げてゆっくり押し倒す。
- (3) 倒壊した土塀を砕いて土嚢に詰める。
- (4) 土嚢を下の地面に下ろし、軽トラで芸大に運ぶ（この日のみで土嚢は235個）



土を土嚢につめる



運び下ろす

だが一回では終わらず、翌日、翌々日も1~4人で終日作業を続け、5月29日にやっと完了した。



運び上げる



最後の土塀部分を倒す



練り土積みめの泥団子。田畑の土にワラを混ぜて団子にして積んだのだろう。そのときの形のまま残っていて、簡単にはずれた。大藪家は、この土地が開拓された17世紀後半以後、早い時期にこの地に建てられた。近くの重保院の半鐘には享保20年(1735)8月15日鑄造と記されており、その後たとすれば、土塀の最古の部分は、250~300年近く前のものと推定できる。

阪神大震災も耐えた土塀は、隙間が多く、中からヤモリの卵の殻がたくさん出てきた。生きたヤモリも多くいた。こんな隙間だらけの構法で300年もつのだ。コンクリートなら半世紀ももたない。しかも土は無限に再生できるが、コンクリートは廃棄処分するしかないのである。



総計約500個になる土嚢は、つちのいえの丘と松尾工務所の菜園のはずれに分けて置かせていただいた。翌月、岡崎公園にすべて運び出す。



大藪家の敷地は広大だった。中央に井戸の跡があり、塩と酒で清められていた。井戸は巨大で、埋めるのに4トンロング・トラックに山盛りの砂10杯を要した。開拓地の中心として、生業の酒づくりのために、重要な役割を果たしたのだろう。